

京都における“ろばた懇談会”活動について

坂 本 麗 一

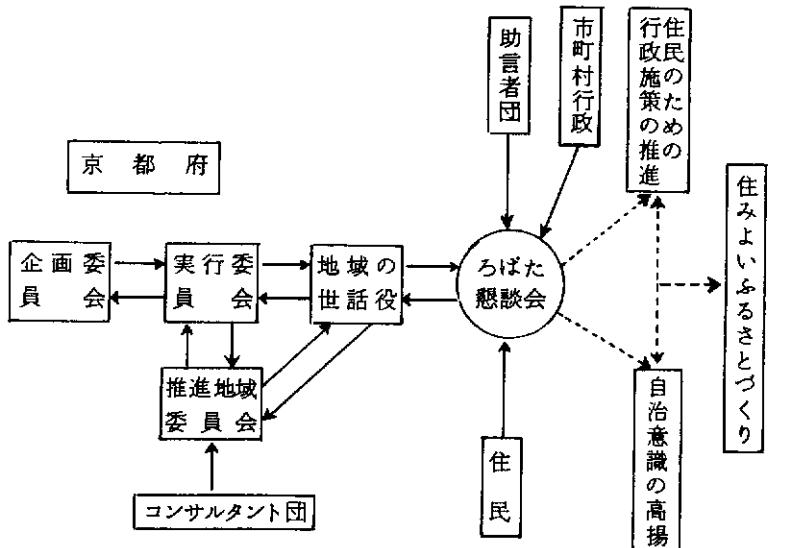
「ろばた懇談会」（以下「ろば懇」と略記）は、一九六七年（昭四二）年度より七八（昭五三）年度までの一二年間にわたって、京都市を除く府下全域、すなわち主として農村地域において実施された社会教育活動である。

以下、まず「ろば懇」の概略を説明し、次にその社会経済的背景を明らかにし、最後に「ろば懇」の意義について考察する。

一、「ろば懇」の概略

「ろば懇」は、京都府教育委員会が社会教育指導の重点として掲げた「ふるさとを守る住民活動」を推進するために組織された。その理念は、「人間をたいせつにし、ともに暮らしを守り、ふるさとを住みよくする意欲と行動力にみちたひとを育成ししようとするところにある。この理念の実現を目指して、「ろば懇」は次のような組織のもとに推進された（推進図を参照）。

ろばた懇談会推進図



「ろばた

という名称

は、ふるさとを表徴す

るものとし

て用られた

と思われる。

それは、フ

ランス語の

Foyer

という語が、

炉やかまど、

あるいはそ

の火を意味

するとともに

に、家庭や

ふるさとや

人びとの団

らんの場を意味すると同様の連想をひび起こす。このよう
なロマンチックな語が社会教育活動の組織名として用いられたこと
自体のうちに、この語にまつわる実態が現に失われつつあるとい
う情況への危機感が込められているように思われる。しかし、この語
はその牧歌的響きのゆえに住民に親まれ、定着していった。

「ろばた懇談会」における話題傾向の推移 (%)

分野別 年度	企画管理	総務	民生労働	衛生	土木建築	農林	商工	企業局	教育	その他
昭42		3	7	10	27	22			22	9
43		5	8	18	29	11			17	12
44		7	11	14	25	14			19	10
45	8	10	11	22	21	11			14	3
46	10	5	10	23	21	12	2	1	16	
47	15	3	11	23	20	9	2	2	17	
48	16	9	7	24	21	6	1	1	16	
49	21	6	8	16	25	7	2		14	1
50	14	6	9.5	15	23	9	1		23	0.5
51	14	7	6	11	24	9	1		25	3

注) 京都府社会教育課「自治意識を高めるために——昭和51年度ろばた懇談会のまとめ」による。

一、四九三 地域、実施回数は三、六七〇回、参加者数は六五、七四八人(うち男が六五%、女が三五%)、平均参加者一人当たり平均参加者数は一七・九人である。そこで話題傾向の推移は上表のとおりである。各年度とも土木建

に、「ろばた懇談会」を実施した地域数は、二年間に

なるべく少ない。なおこの表で「企画管理」は交通・開発・都市計画などの話題を含み、「総務」は税金・自治会・過疎対策などを、「民生労働」は保育所・子ども遊び場・出稼ぎ・職業安定などを、「企業局」は上下水道などの話題を含んでいる。この表は「ろばた懇談会」で出された話題に關係の深い京都府知事部局を中心分類したものである。そこで、話題内容に即して再分類すれば、次のような三つの項目に分類できるようと思う。

- (1) 生活基盤の強化……農林業その他の地域産業の振興、労働軽減、職業安定などによる所得確保、後継者育成、生活改善など。
 - (2) 生活環境の整備……保健・衛生・医療施設の充実、河川改修、道路整備、交通安全施設の整備、公害・災害防止対策の充実、教育・スポーツ・文化施設の拡充または整備など。
 - (3) 生活文化の向上……子どもの健全育成、青年・婦人・老人各層の役割分担と生きがいの充足、家庭の安定と健康、住民の連帯と協同の強化、各世代ごとの学習機会の増大、農村の伝統文化・文化財の保全、余暇の確保とスポーツ・レクリエーションの日常化など。
- 右のうち、最近では(1)よりも(2)(3)に関する話題が多くなる傾向がある。この点で、農村住民の生活課題と都市住民のそれとが接近し

てきていると言えそうである。

「ろば懇」について住民がどのように考えているかは、一九七一（昭四六）～七七（昭五二）年の各年度になされたアンケート集計によつて知ることができる。各項目ごとの各年度を通じての最低・最高の割合は次のとおりである。

「ろば懇を知つていたか」七一・六一八三・五%。「気がるに話しあえたか」五八・四一七一・〇%。「地域の問題が学習できたか」七四・八一七八・〇%。「くらしをよくするのに役立つか」八六・一一八八・八%。「この会をきつかけに何かやろうと思うか」四六・八一六三・九%。「自分たちですすめる必要があるか」七八・四一八七・四%。「この回数は何回ぐらいがよいか」「二回」一七・四一二四・一%、「三回」三五・五一四五・二%、「四回以上」一九・四一三三・三%。

右のアンケート集計結果は、社会教育活動としての「ろば懇」の成功を裏付けるものと見てよいのではないか。

二、「ろば懇」の社会経済的背景

「ろば懇」が実施された期間は、高度経済成長のさなかから減速経済への転換期に当たるが、その発足と展開は、高度経済成長による農村地域における生活システムの崩壊過程と密接に関連する。

戦後間もない頃の農村社会は、明治以来の近代化とともに崩壊の過程をたどっていたとはいえ、なお多かれ少なかれ村落共同体的地域生活システムを温存していた。村落は、その物質的基盤である用水や林野などの共同利用・管理のために種々の規約・組織・制度・

慣行を形成していた。こうした地縁的な生産システムは、イエを中心とする血縁的な生活システムと重なり合いながら、強力な相互扶助組織、あるいは自己規制的、自主管理的な地域生活システムを構築していた。

だが、一九六〇年代からの高度経済成長は、こうした村落共同体的地域生活システムを個別化(individualization)の方向への急激な解体させていった。ここで「個別化」とは、個人主義化、個別經營主義化、単作化、機能主義化、核家族化などを包括する概念である。農村地域における個別化を推進した要因は、とりわけ農業の工業化ならびに農村の都市化である。そのプロセスはほぼ次のとおりである。

(1) 農業の工業化：農業の機械化・化学化・装置化の形で進められた農業の工業化は、労働生産性を飛躍的に向上させた。一九六〇～七五年に、稻作一〇・八当たり投下労働時間は一七一・一一七七・一時間と短縮した。節減された労働力は農外へ流出した。これは、一方では地価高騰によつて農地の家産化が進み、經營面積の拡大が阻まれたこと、他方では高度経済成長によつて非農業部門の労働吸引力が増大したことなどによるものである。その結果、同じ期間に専業農家は三四・三（一二・四%）と激減し、兼業、とりわけ第二種兼業農家は三二・一（六二・一%）と激増した。こうして農村地域は内部から混住化し、地域社会としての同質性と連帯性を急速に喪失していく。

また、水利施設の近代化は用水をめぐる旧来の共同システムを無用化し、燃料革命の進行や化学肥料、配合飼料への依存強化は、薪

炭材や採草のための共有林野の重要性を著しく低下させた。配合飼料依存による舍飼いの普及、機械化による役畜の排除、畜産の大規模専業化もまた共に有林野の利用価値を低下させた。一九七〇年以降における田植を含む稻作における機械化一貫体系の完成は、農村の古くからの慣行である共同作業の消失に寄与した。それは同時に個別化の進行を意味する。

(2) 農業の都市化

…都市化とは、農村地域が市街化するだけでなく、農村地域住民の生産・消費・行動・価値観を含む生活様式の全体が、都市の生活様式を基準に再編され、変質していく過程である。

農業の工業化は従来の農家の生活リズムを規則化し、ゆとりあるものにした。農村地域への工場・住宅の進出は農村地域を外部から混住化させた。モータリゼーション・情報網の拡充、観光旅行の日常化は農村住民の行動範囲を拡大させ、彼らの意識を都市住民のそれに接近させた。工業製品の流入は生産・消費の両面で農村地域に自給力を失わせた。一九六〇～七五年に、農家の食料自給率は五七・〇～二六・一%と低下した。プロパンガス、電化製品、石油ストーブ、簡易水道などの普及は、農村の主婦労働を著しく軽減し、彼らのパート化を促すとともに、伝統的な台所スタイルや食生活の洋風化を推進した。住宅も洋風化、個室化の方向を強め、核家族化の進行は老齢者との間の世代的溝を深めつつ、個別のマイホーム化の意識を強めた。

以上のような農業の工業化、農村の都市化傾向は、京都府の農村地域でも全国的傾向を上回る形で目撃される。それは、農村地域

における共同体的地域生活システムの崩壊と個別化の進行として要約される。こうして、農村地域は、工業化・都市化に伴う生活環境の利便性の個別的に享受しながら、工業化・都市化に伴う生活環境の悪化に対しては、これを規制する共同の力や自主的解決能力を大きく弱体化させていった。『ろば懇』の課題は、まさにこの点にかかっていたのである。

三、『ろば懇』の意義

工業化と都市化を両輪とする高度経済成長は、農村地域をかつてない変動の渦中に巻き込んだ。こうした社会経済的背景のもとに充足する『ろば懇』は、何よりもまず外部からのインバクトに対しても地域社会を自衛する役割を担つて展開した。もちろん、防衛は、単に昔のままの生活システムの維持を目指すものではなかつた。農村地域の特性である連帯と共同、美しい自然環境を保全しながらも、都市住民が享受する生活の豊かさ、便利さ、快適さを、農村住民もまた求めようすることはむしろ当然である。

だが、農村住民がこうした当然の欲求を充足するためには、他方では、農村の共同体的地域生活システムを切断し、地域住民を個別化させている工業化・都市化を受容し、これに適応していくしかなければならない。これは一つのジレンマである。『ろば懇』はこうしたジレンマの中で苦闘を通じて、『ろば懇』が実現しようとしたのは、地域住民の総福祉を自らの手で可能な限り向上させようとすることであつた。行政の力に頼らざるをえない面を含むこの努力には限界があつたとはいえ、ともかく、『ろば懇』は生活基盤の強化、生活

環境の整備、生活文化の向上を地域課題として発見し、その解決に向けて実践活動を開拓したのであつた。

「ろば懇」が追求した地域住民の総福祉の向上という地域課題は、高度経済成長期の支配的価値観である物量的生産力極大化の方向と明らかに異なる。この点で「ろば懇」は、工業化、都市化への防衛と適応を通じて新しい地域づくりの目標を探し当て、この目標に即して新しい地域生活システムの構築を試みた、と言えるのではない。もしも「ろば懇」が、工業化・都市化の大波にもまれながら体得した「個」の自覚のもとに、かつて伝統的、慣習的に保持してきた共同と連帯の地域生活システムを、自覺的、自主的な共同と連帯の地域生活システムに転換する役割を担つたと言いうるならば、なお個別化の矛盾の中で突破口を探しあぐねている都市住民に対して、「ろば懇」は逆に一つの新しいモデルを提供していることになろう。「ろば懇」一二年の歩みは、この点に一つの歴史的意義を見出しうるのでなかろうか。